

01

DX

REFERENCE

M26_01



INSTRUCTOR GUIDE SERIES

| このマニュアルについて

このマニュアルは研修の講師・インストラクターが、研修を実施する際の活用、また独自のプログラムづくりの参考のために作られたものです。以下の内容で構成されています。

- ・●●.pptx：研修用のスライドです。「ノート」に講師の話す内容が記載されています。
- ・●●.docx：研修の配布資料です。受講者用に印刷し配布してください。
- ・●●.pdf：スライドと配布資料をまとめた PDF ファイルです。

| 活用方法

マニュアルやシート、ワークシートは、購入いただいた方々が、研修ニーズや状況に合わせて、手順や内容を加筆、修正して活用していただいて構いません。研修効果を挙げるためには内容を受講生やニーズに合わせてカスタマイズしていただいた方が望ましいかもしれません。またインストラクターによっては、研修を展開するパターンが異なりますので、自己のパターンにあわせ大幅に修正し、活用することも必要になると思います。このマニュアルとシートを参考に、新しいレッスンプランを作成して、効果的な研修の実施にお役立ください。

| 使用上の注意点

マネジメントアドバイスセンターが販売する研修用マニュアル、ゲームマニュアル等の著作権は当社が所有いたします。したがって購入者の皆さんには、利用権の譲渡になります。社内研修を行う上での利用料などは一切発生いたしません。

購入者は教材を社内研修などで、自由にコピーなどして利用できます。また活用しやすいように、編集、アレンジ、修正して使うこともできます。ただしマニュアル、シート、ワークシート等を第三者に譲渡、インターネット上などでの配布、生成 AI サービスへアップロードすること、レンタル、販売および著作物の制作に使用すること、無断で転用することは禁止致します。

また、研修の実施やマニュアルの内容についてのサポートは行なっておりません。

| お問い合わせ

ご不明な点、利用上で気になる点などございましたら、下記のメールアドレスにお問い合わせください。

shop@m-advice.co.jp

DXリテラシー基礎

～デジタル変革の本質を理解し、自らの役割を見つける～

対象: 全階層（新入社員～管理職）

研修時間: 2.5時間

1 / 30

【開始前の準備 / 所要5分】

- 受講者を4～5名のグループに分けておく（可能であれば部署・階層をミックス）
- A4用紙とペンを各テーブルに配布
- ワークシート（3種類）を人数分印刷しておく
- Wi-Fi接続情報を掲示（演習でスマートフォン・PCを使用する場面あり）
- 「今日はDXについて一緒に考えていきます。IT部門だけの話ではなく、すべてのビジネスパーソンに関わるテーマです。気軽に参加してください」と声かけ
- 全階層共通のため、受講者の役職・経験年数にばらつきがある。多様な視点を活かすグループ構成を意識する

本日の目標

この研修を通じて、以下のことができるようになります

1. DX（Digital Transformation : デジタル技術による事業変革）の本質と、単なるデジタル化との違いを説明できる
2. DXを支える基盤技術（クラウド、AI、IoT等）の概要を理解し、業務との関連を語れる
3. 自社・自部門でのDX推進における自分の役割を具体的に考えられる
4. データドリブン（データに基づく意思決定）の基本的な考え方を実践に活かせる

2 / 30

【時間: 3分】

- 「皆さんの中で、"DX"という言葉聞いたことがある方はどのくらいいますか？」と問いかけ、挙手を促す
- 続けて「では、DXとは何かを一言で説明できる方は？」と聞くと、多くの場合手が下がる。「今日はその"一言で説明できる"状態を目指しましょう」とつなげる
- 4つの目標を読み上げた後、「特にどれに関心がありますか？」とチャットや挙手で反応を促す

アジェンダ

1. DXとは何か — 定義と本質を理解する（25分）
2. なぜ今DXが必要なのか — 環境変化と危機感（20分）
3. DXを支える基盤技術（25分）
4. DX成功・失敗の事例に学ぶ（20分）
5. 現場で活かすDX視点とデータドリブン思考（20分）
6. DX人材と一人ひとりの役割（15分）
7. まとめと振り返り（10分）

※ 途中、演習・グループワークを挟みながら進めます

3 / 30

【時間: 2分】

- 全体の流れを簡潔に説明
- 「座学中心ではなく、グループでの議論や手を動かすワークも多く入れています」と伝え、参加型の研修であることを意識させる
- リモート参加者がいる場合は、チャット機能やブレイクアウトルームの使い方を案内
- 「ITの専門知識がなくても大丈夫です。ビジネスパーソンとしての視点で考えていきましょう」と安心感を与える

アイスブレイク「あなたの身近なDX体験」

【グループワーク】（所要時間：5分 / 4～5名1組）

テーマ：「最近、"便利になったな"と感じたデジタルサービスは？」

- スマートフォンで完結するようになった手続き
- AIが自動でやってくれるようになったこと
- 仕事のやり方がデジタルで変わった経験

→ グループ内で1人1分程度シェアしてください

4 / 30

【時間：8分（説明1分＋ワーク5分＋共有2分）】

- 難しく考えず、日常の体験で構わないことを伝える
- 例：「銀行の窓口に行かなくてもスマホで振込ができる」「ChatGPTで文章の下書きをつくった」「コンビニのセルフレジ」など具体例を出すとハードルが下がる
- 2～3グループに代表的な体験を発表してもらう
- 「今挙げた体験の裏には、すべてデジタル技術があります。今日はその"仕組み"と"本質"を学んでいきます」とセクション1への橋渡しをする

セクション1 — DXとは何か

DX (Digital Transformation) の定義

経済産業省の定義 (2018年「DXレポート」):

企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること

ポイント:

- DXは「デジタル技術の導入」だけではない
- 事業や組織の「変革 (Transformation)」が本質
- 競争優位性の確立が最終目標

5 / 30

【時間: 5分】

- 定義を読み上げた後、「少し長いですが、要するに"デジタルで会社の在り方そのものを変える"ということです」と噛み砕く
- 「Transformation」の「Trans」は「超える・変える」の意味。X (Cross) と表記するのは「交差して変わる」ニュアンス
- 想定質問: 「なぜDXと略すのにXを使うのか?」 → 「英語圏では"Trans"を"X"と略す慣例がある。例: クリスマス→Xmas」
- 2025年時点の文脈では、生成AI (Generative AI) の急速な普及がDXをさらに加速させていることに触れる